

俳句雜誌

鳴

2016年
10月号

通卷 594 号

二〇一六年十月一日発行
二〇一六年十月一日発行
二〇一六年十月一日発行



旦過亭より

白桃しろももを置けりたゆたふ刻こくのなか

白潮

昭和五七年作



中国の古典「詩経国風」に「桃夭」という一編がある。わかもものような娘といった意味で、一茶に「不相応の娘もちけり桃の花」があるそうだ。

桐一葉

井上信子



針山に針の鎮もる桐一葉
黒揚羽さも軽やかにかくれたる
三毛猫が三日来てをり休暇明け
小鳥来るわが家系図の簡明に
レモン切るすべて教へてくれしかな
れもん置くただ端正にあらんとす
小鳥くる瞬きてまた瞬きて

靴紐

高橋道子

靴紐を結ふに十法雲の峰
夕電車夏野の景を置去りに
つまづいて蜥蜴走らす一番星
てなづけつつ糊の夏シャツたたみけり
打つ文字の心に遅れ梅雨の月
楽勝の記憶なかりし籐寝椅子
夏柳気ならぬものは持たず着ず

十月集

秋 彼岸

中江月鈴子

種を採るひまはりに札つけにけり
朝顔の種てのひらに無常感
鶏頭の背丈の揃ふ夕日光
こほろぎの髭切れるまで暴れさす
秋彼岸砂利を掻き寄せ草を抜く
墓石の温みは妻の温みの秋彼岸
何か違ふを求めての日々秋彼岸

蹠 蹠と

山崎靖子

蹠蹠とゆかねば八十路日雀鳴く
片蔭のやせざるうちに済ます用
枝豆の畑小屋に咲くちちとはは
枝豆の湯気もてかすむ仏膳
読んでまた蔵ふ文なり半夏雨
誰がために存在つくす水中花
奥つ城の阿吽よ泰山木の花



梅 雨 荒井和昭

あらかたは捨てる選別梅雨茸
凌霄花くぐりて女かしこまる
顎紐をしつかり爺の麦藁帽
約束を思ひ出したる汗の顔
鱧料る磨ぎし刃を指に当て
かたときも青虫の喰ふ若葉かな
橋ふたつ越して切手を行々子

俯き咲き 風間史子

貝塚を翔つ梅雨の蝶無彩色
向日葵の俯き咲きに並びけり
子の家の床の間もどき祭笛
遙かまで飛び立つ構へ羽抜鶏
鼻がしら潰して嗅ぎぬ青き柚子
わだかまり飛ばしてくれし日雷
籐椅子に昨夜のくぼみのありにけり

雑 念 田村園子

独白に始まる舞台こゑ涼し
抽斗に死蔵するもの香水も
辞書で聴く鳥の鳴きこゑ籐寝椅子
レース編む失せゆくものを手繰るかに
漂白をせむ雑念もハンカチも
はたらきに倍する汗をかきにけり
くさぐさの念ひに撓む七夕竹

啞 蟬 原田達夫

虫干や羅宇に罅入る銀ギセル
カステラのやうな建売り梅雨の街
玄々と競り合うてをり梅雨の川
黴なんぞ一吹きで済む世代なり
あぢさゐのあをそれぞれのあをおもふ
竹夫人いつの間にやらどこへやら
啞蟬のただじつとして雨に堪ふ

紙魚の痕

笠井敦子

唾蟬の長き一日の暮れにけり
一束の父の文出で紙魚の痕
降り立てば父郷は桐の花ぐもり
草取りの限界すぐに来たりけり
思案してゐるうち暮るる墓
葎切の声に思はず急ぎ足
無住寺の樹齡百年凌霄花

変はらぬは

田部井幸枝

捕虫網押さへ上げ様逃げられる
あぢさゐの枝振りにある陰日向
かたばみの類根こそぎ雨模様
昼寝覚振れぬ意識を意識する
言偏の文字に親しむ扇風機
変はらぬは糠漬三時間の胡瓜
蛞蝓の寿命伸ばしてやりにけり

潮鳴り

山本無蓋

潮鳴りや緑滴る宮の杜
大漁の奉納絵馬や蟬時雨
氷菓売るピアスの男不愛想
夏鷗光る浪間の句読点
白南風の沖航く世界一周船
麦星や干さるる網を抜ける風
意気揃へ海に繰り込む荒神輿

大雑把

齋藤厚子

帰省子や積もる話の大雑把
喉元に引つかかりたる心太
同僚に脆さのありて蟻の列
大花火殊更昏きところかな
対抗リレー魂ぐるみ泳ぎけり
さよならを云うて暫く子かまきり
子らに負け蹶涼しくもどりけり

滑走路

高田令子

西日受け快速電車遅れ気味
夏草の短かく刈られ滑走路
南風に欧州便の跳び発てり
タワーから見渡す台地夏深し
夏の日の暮れ残りをり誘導路
熱帯魚蒼く煌めく地下通路
風鈴の導く旅客ターミナル

風を揉む

加藤峰子

半身の影の出たがる白日傘
のうぜん咲く揉み合ふやうに叫ぶかに
手囲ひの揚羽を空に放ちけり
炎熱やジーンズの尻叩き干す
風揉んで佳き七夕の竹となる
突つく棒引けばたちまち海月群る
夕焼や宿に吊るさる大わらぢ

甚平

相良牧人

墓人間界を問ふ構へ
短命に生きて空蟬残したる
梅雨夕焼狼煙のやうな雲を上げ
執念は蜘蛛に敵はぬかもしれぬ
プール満水投票所は列なさず
千早振る寄席の打出し夏の月
甚平の脇甘くなる年頃で

月見草

荒木甫

富士噴火見て逝くつもり月見草
飛蝗の子抓めばよよと折れるかに
牛蛙後生ごしやうと呻きをり
おはぐろの翅をたためば風止みぬ
向日葵の一茎一花こそ愛す
空蟬の背に臍の緒のごとく筋
電柱に質屋の広告大暑かな

寒 麦 集



荒木 甫 選

青 葉 風

足 立 良 雄

夏至の日の背中合せに負はれし子
子の未来預けて巻けり落し文
焼酎やゴツホの狂気少し欲し
遠花火形見の猪口を使ひけり
少年の阿修羅像の目青葉風

青 ず だ れ

江 澤 弘 子

平凡てふ家宝ありけり稲の花
雨音の一気に太し青すだれ
梅雨満月はんなりと置く東口
師の訓いつも直球青すすき
金色の光のシャワー揚花火

悪 友

中 島 芳 郎

老いらくの子供に還る水鉄砲
明日知れぬ世とは思へど茄子の花
鮎三尾姿正しう焼かれけり
やあやあと腕押し入る夏のれん
悪友と呑み明かしたる夏の果

水 母

山 内 洋 光

漂うて傷癒しみる水母かな
蚊柱の確かに立つは西の空
二の腕の境の出来し日焼かな
梅雨しとど国土崩るる報しきり
作り手の名の貼られぬるトマトかな

鳴俳句

高橋道子選

目でものを言ふとは羽抜鶏のこと
船橋 佐々木秀子

夏服の皺をのばしてやる別れ

初蟬をいまだ聞かずや地震しきり

家守る妣の気概の草むしり

遠星を引き寄せぬたる端居人

ひとまづは大樹の蔭に汗を拭く

ゆすり込む神輿に白き渚かな

くづほれて砂に平伏す土用波

草笛や黒牛の耳大きかり

縁日のどれがどの音よ江戸風鈴

金魚玉猫の肉球大映し

千余回地震に揉まれしトマト食ぶ

突つ掛けを蜥蜴が履いて行かむとす

焼酎に甲乙つけるつもりなし

一票の何も変はらず心太

相良牧人

鎌田光恵



先頭を行く白服のピンヒール
高田令子

旧館の広き廊下の風通し

フリルの日傘弁護士の忘れ物

会長と向かひ合はせの夏料理

労ひの言葉を受くる扇子かな

真黒な影もて百葉箱盛夏
千葉成田美代

少年の腰に鍵束日雷

噴水の向かふの人に日の当たり

天金の句集を開く真夜の朱夏

初蟬やミルクを満たすマグカップ

紙ひかうき擬宝珠にびゅつと急降下
我孫子
山口ひろよ

河骨の金鈴二つほか無音

庭清水井月さんと呼ぶ住持

主峰より渡る轟音梅雨の川

思ひ出すひとの名水母裏返る

選後余録

高橋道子

夏服の皺をのばしてやる別れ

佐々木秀子

帰省したお子さんか、お孫さんであろうか、もうその滞在が終り、帰ろうというとき、作者はその子の夏服に少し皺が寄っていることに気づいた。「あちよつと・・・」と、その背か肩かを撫でて、皺をのばしてあげた作者である。本当に些細なことなのだが、この句からただよう、あたたかいながら少し寂しい雰囲気がなんともいえず詩情がある。たとえばこの句が「別れ際子の夏服の皺のぼす」などという報告の句だったらつまらなく、このような俳味はとて出ないだろう。末尾の「別れ」という名詞形がよいのだ。この作者の、素朴な詩情とユーモアの漂う独特の句風にはかねがね注目してきたが、掲句にはそれがみごとに結晶しているのではないだろうか。

くづぼれて砂に平伏す土用波

鎌田 光恵

土用波の姿をよく見て、丁寧に描写した一句である。「くづぼれて」「平伏す」はともに動詞、また擬人法を用いているが、それがすんなり成功して、なるほどと納得させてくれる。一枚の土用波の姿から、海と浜の大景が広

がる。

金魚玉猫の肉球大映し

相良 牧人

金魚に野心をもやした猫が、金魚玉に手をかけた時の一瞬の景と読んだ。ガラスを通して肉球が大きくあらわにクローズアップされて、読者の視覚に訴えてくる。もう一句の「千余回地震に揉まれしトマト食ぶ」は、このたび大地震のあった熊本、阿蘇出身の作者の、思いのこもった一句であろう。現地の復興がすみやかに進みますように。

フリルの日傘弁護士の忘れ物

高田 令子

仕事の場での句であろうか。作者が会って話をした弁護士は女性、それもかなり若い方だったことが、「フリルの日傘」に象徴されている。しつかりした弁護士なのだろうけれど、忘れ物をしたという、うっかりしたところが、却って親しみを感ぜさせて楽しい。仕事の上で現役、働き盛りの作者ならではの切り取りと破調が新鮮である。

真黒な影もて百葉箱盛夏

成田 美代

学校や公園などにある百葉箱、私達は「ひやくようぼう」と学んだが、現在は「ひやくようばこ」と呼ぶという。白い百葉箱が、緑の芝生の辺りに真黒な影を落とし、色彩の

取り合わせも気持ちよく、まさに真夏の景。

言ひ負かす事の面倒冷し酒

宮崎 高根

話し相手と意見の違いが出たとき、丁寧に、はっきりと論駁できればよいのだが、ちよつと躊躇してしまう。言い負かすことは簡単、私が正しいのだから、と思つてもつい面倒になってしまふ。それほど大したことではないし、それよりも、まあ、冷し酒といきましょう、という心理をとても巧みに捉えていて感服。

ほうたるにうれしき闇の深むなり

中島 芳郎

「うれしい」のは蛩ではなくて、蛩を見ている作者であらう。闇よ、もつともつと深くなれ。

夏川にずんずん入りり測量士

宇都宮敦子

「ずんずん」の擬態語が効いた一句。夏川でなければこのようなにはゆかない。季節の中で働く測量士の姿が生きて捉えられている。

絵本読む落雷の声気に入られ

島田 喜郎

幼児に絵本を読み聞かせている景であろう。「ゴロゴロ、ドカーン」という落雷の音を、節をつけて面白く読んだところ、幼子がとても気に入り、「もつとやつて」とせがんでくる・・・孫俳句は可愛さにおぼれるからあまり詠むべ

きではないと教えられてきたが、このような句に出会うと、やはり、感心してしまう。下五中七の運びもなかなか達人。

蝸がよき搖籃の微酔なり

佐藤 山人

九十歳を越えられた作者の、矍鑠とした、そして心のゆとり充分な一句。上等な微酔である。

まつりぐけする如蛇の川渡り

三木 千代

「まつりぐけ」は、針を使う女性でないとわかりにくいかもしれないが、端布の処理にもちいる縫い方。蛇が川を渡る姿に、一針ずつ布をすくつてゆくまつりぐけを連想した作者である。観察の行き届いた句というべきであらう。

水を打つ人のうしろを通りゆく

足立 良雄

よくある景ながら誰も句にしなかつたという気のある句、言われてはつとずする句である。この「うしろ」を詠むことが、俳句にとつて大切なのだと思う。

髪洗ふ心に柱ひとつ立て

松林 依子

髪を洗うときは何故かものを考えたり、思い出したりするもの。掲句、一読「心に柱」がわかりにくかつたが、再読して、作者になにか新たな覚悟のようなものが生まれたのだと解した。「生きざま」の滲む骨太な句作りが若々しい。

羽音抄

今月の鳴俳句より

夏服の皺をのぼしてやる別れ
くづほれて砂に平伏す土用波
金魚玉猫の肉球大映し
フリルの日傘弁護士の忘れ物
真黒な影もて百葉箱盛夏
言ひ負かす事の面倒冷し酒
青田漕ぐ兄とも違ふそびらかな
ほうたるにうれしぎ闇の深むなり
夏川にずんずん入れり測量士

高橋道子選

佐々木秀子
鎌田光恵
相良牧人
高田令子
成田美代
宮崎高根
山本久江
中島芳郎
宇都宮敦子

絵本読む落雷の声気に入られ
橋脚を仇とばかり暴れ梅雨
半夏生寂しい時に出る微笑
蝸がよき揺籃の微酔なり
まつりぐけする如蛇の川渡り
交番に水の打たれてみたりけり
水を打つ人のうしろを通りゆく
髪洗ふ心に柱ひとつ立て
河骨の浮島揺らす日照雨かな
曾祖父は汗して振売りせしといふ
大切な一言いへぬ天の川

島田喜郎
西村将昭
藤兼静子
佐藤山人
三木千代
森田尚宏
足立良雄
松林依子
木澤恵司
田中涼平
藤野瑛子